

府民公開講座（陽子線治療）の開催報告

2022年7月

京都府立医科大学附属病院 永守記念最先端がん治療研究センター
府民公開講座事務局

京都府立医科大学附属病院 永守記念最先端がん治療研究センターでは、2022年4月に保険適用の対象疾患が拡大されたことを受け、陽子線治療を広く京都府民の皆様にご紹介いただくため、2022年7月1日(金)に府民公開講座（オンライン）を開催いたしました。

京都府立医科大学 創立150周年記念府民公開講座

「知っておきたいがん治療 陽子線治療アップデート ～保険適用の対象疾患が拡大されました～」

(1) 講演「当院における陽子線治療の特徴と治療実績、陽子線の保険適用拡大」

京都府立医科大学大学院医学研究科 放射線診断治療学 助教 相部 則博

(2) 質疑応答



当日は、約90名の方々にご聴講いただきました。

講演では、陽子線の概要、日本における陽子線治療の適応疾患（2022年4月より保険適応疾患が拡大された、大型肝細胞癌・肝内胆管癌・局所進行性膵臓癌・大腸癌術後局所再発）、当院での陽子線治療について紹介しました。

質疑応答では、陽子線治療と重粒子線治療の違いや晩期障害についてなど、様々な質問があり、先生が回答しました。

【質疑応答の内容（一部）】

Q1 膵臓癌の陽子線治療の相性は、重粒子線治療と比較して良いのでしょうか？

A1 膵臓癌の治療に対する陽子線治療と重粒子線治療（炭素線治療）を直接比較した質の高い臨床試験が存在しないため、どちらが優れているか答えるのは難しいです。現状では、陽子線治療のデータと炭素線治療での報告されている治療成績の結果はほぼ同じであると考えています。

局所進行性膵臓癌に関しては、放射線治療だけでなく抗がん剤治療もしっかり受けることが重要となるため、抗がん剤治療をしっかり受けながら放射線治療を受けられる環境を整備することが大事であると感じています。今後、新たな知見が出てくれば、線質の適正性は明らかとなってくる可能性はありますが、現状ではあまり線質にはこだわらず、化学療法を併用し、適切な時期に放射線（陽子線、炭素線）治療を受けられる環境を整備することの方が重要であると考えています。

- Q2 状況により変わることが前提と推察しますが、受診依頼を行う先生は外科と内科の先生どちらが主になりますでしょうか？
- A2 今回保険収載化された4疾患においては、どちらかと言えば、内科の先生からの紹介が多いです。ただ、外科の先生からも紹介していただく場合があります。保険適用が拡大されてからは、適応となった疾患の紹介は増えていると感じています。
- Q3 胆管がんの晩期障害、副作用について気を付けておくことがあれば教えてほしいです。
- A3 特に注意が必要な胆管癌治療後の晩期障害に関しては、胆管狭窄や（反復性）胆管炎が挙げられます。特に肝門部-肝外胆管癌で、もともと胆管炎を繰り返している方では、陽子線治療中や治療後に胆管炎を繰り返される場合があります。そうでない場合でも、治療することで胆管炎が発症したり、胆管炎を繰り返し発症してしまう場合もあります。また、消化管が近接している病変部位においては、消化管をできるだけ外して陽子線を当ててはいますが、消化管の潰瘍・出血などが起きてしまう場合があります。

講座を聴講された方からは、「陽子線治療について、わかりやすい内容で、理解が深まった。」などの感想をいただきました。

次回の府民公開講座については、日程が決まり次第、永守がんセンターのホームページや SNS でご案内いたします。